

私はこんな風に使っています！

研究部 育種課

このコーナーでは、「自然農法の種子」を活用いただいている方々に焦点をあて、栽培や種子に対する思い、使用している自然農法品種についてご紹介します。

農林水産省が公表した平成23年新規就農者調査結果では、新規就農者は5万8120人と前年に比べ6.5%の増加となり、そのうち、女性の新規就農者は1万1810人で全体の20%を占め、実に新規就農者の5人に1人が女性という結果です。農業にも女性の時代が来ているというのでしょうか。

第3回となる今回は、女性の就農者として活躍されているオーガニック農場「キノカフェ」の井波希野さんを訪ね、活動の取り組みや栽培種子に対する思いについて伺いました。

“おしゃれで若い人にも注目される農業を目指して”

井波さんは農業関係の短大を卒業後、スイスへ1年間農業研修に行き、そこで農業のすばらしさを体験し就農を決意しました。帰国後、地元の山梨県北杜市で農業を始め、就農認定を受け、2004年に有機栽培によるオーガニック農場「キノカフェ」を立ち上げました。研修先だったスイスは国土の70%が山岳地域で占められており、観光資源でもある農山

村の風景を保護していくという意識が高く、国民は農業の保護は文化の保護という理解がある国です。そのため、他の産業に比べ手厚い保護を受けていますが、そこで暮らす農家の豊かな暮らしぶりに感動し、刺激を受けました。そのスイスの豊かな暮らしぶりと農作物の品質が世界一といわれる日本の農業技術の長所を融合させたいと願い井波さんはその実現に向かって、農業に取り組んでいます。

就農当初は、10a程の畑でしたが徐々に増やし、現在は1ha程あります。野菜の品目も増やしていき、年間を通して60品目の野菜を栽培しています。農園スタッフとして研修生や畑ボランティアを受け入れながらも、通常は井波さん一人で栽培し

ています。収穫した野菜はセットによる宅配や地元山梨県や東京のレストラン、近くの道の駅などへ出荷しています。

身の丈にあった農業

水田から転換した畑がほとんどで、土作りを栽培の基本として、土壌分析を行いながら米糠や腐葉土、堆肥、有機質肥料などを入れ、10年程試行錯誤しながら土を育てています。最近の一部の畑で「自然栽培」を試しており、栽培に関してとても研究熱心です。雑草や病虫害に対し



今回訪問したオーガニック農場「キノカフェ」の井波希野さん



詳しくは「キノカフェ」HPをご覧ください。
<http://kinocafe.jimdo.com/>



上：オーガニック農場「キノカフェ」の圃場
左：収穫間近のみずみずしいロックウェル
右上：道の駅に並ぶエルシー

でも特別な対策をせず草の存在も意味あるものとして、また虫は土の状態が良くない時に出てくるものと捉え、土をよくすることを重視して栽培しています。

「自然農法の種子」との出会いには知人より紹介を受けたことがきっかけで使い始めました。当初からトマト品種「メニーナ」を愛用しています。「メニーナ」は市販品種に比べ露地栽培に強く栽培がしやすいうえ、甘みと酸味のバランスの良さがお気に入りです。

出荷の関係で交配種も使用していますが、栽培する品目の約8割が固定種です。できることから自家採種にも取り組んでいて、自然農法品種のトマト「メニーナ」や「ハートハート」、ナス「在来青ナス」も自家採種していました。

今回、レタスの畑を見学したところ、「ロックウェル」のほかに「エルシー」や「エルワン」も栽培し、収穫間近でした。去年果菜類を栽培し、その後レタスは無肥料で栽培していました。生育は旺盛でみずみずしいレタスが育っていました。今年の果菜類の定植はこれからで、育苗には、畑の土と踏み込み温床（前年）

の土を混合した育苗用土を使用しています。

井波さんは菜園のほかに地域での活動にも積極的に取り組んでいます。地元の保育園で月1回菜園指導をしており、子ども達と一緒に種を播き、収穫をしています。この菜園指導や小中学校の給食に自分の野菜を使っていたりしていることなど、地元とのつながりがとても励みになっています。

今後は、畑の規模を拡大するのではなく、畑の管理が行き届き農家として恥じないおしゃれな農業を目指

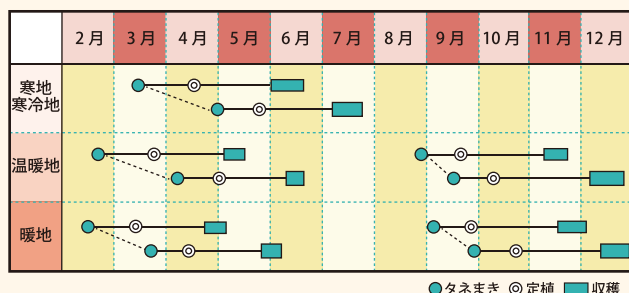
今号の紹介品種

レタス「ロックウェル」

サラダの定番、結球するレタスです。旺盛な生育で球が大きくなり、しまりが緩く固くならないのが特徴です。球の中心が淡い黄色で葉肉が厚く、甘みがある美味しいレタスです。冷涼な気候を好み初夏どりや秋どり栽培がおすすめ。



作型図



して、美味しくて美しい野菜を育て、旬の野菜と消費者のニーズとのバランスをとり皆様に喜んでいただけるよう、情報の発信に力を入れていきたいと意欲を燃やしていました。

10年程前は女性の就農者も少なく、注目されたためラッキーだったと謙遜されていましたが、農業に対する想いには熱いものを感じました。一人で始めた農業ですが、「Cafe」のようにたくさんの方が気軽に集まってくる、そんなすてきな農園でした。

（原田晃伸）